

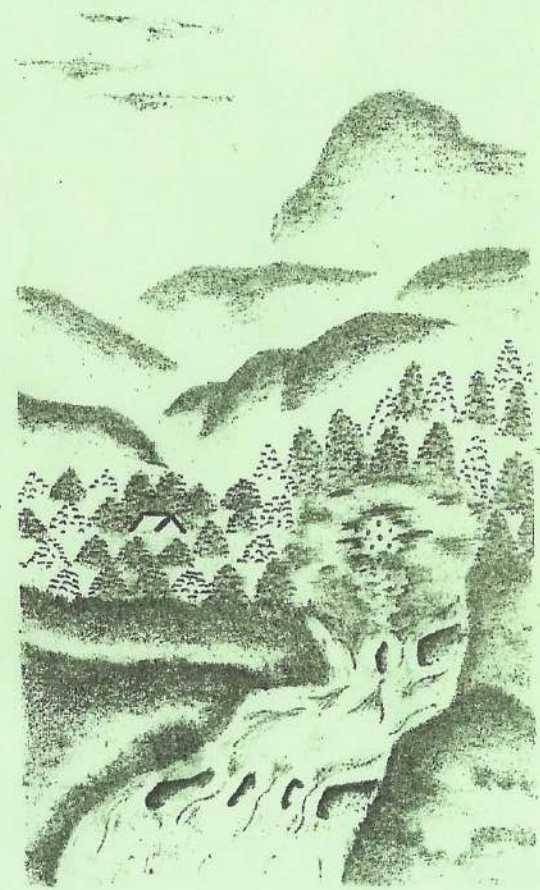
湧水

湧水

第六号

平成二十七年三月

発行



千代田岳精会 自作自詠俳句研修会



棕櫚竹や月に背いて影二本 夏目漱石

俳句に出会って

滝沢 はる

自作自詠俳句研修会の入会に前田顧問より勧めて頂き、同じハザマ教場の神田さんと何もわからないまま早や一年になろうとして居ます。

俳句はわずか一七音の文字によって作られ、世界でもっとも小さな詩です。春夏秋冬の豊かな自然、日常生活の喜怒哀楽まで、さまざまなものを盛ることが出来ます。なかなか思うようには行きません。

リーダー始め諸先生方をお手本に楽しみたいと思います。また初めて湧水に出句した時は、嬉しさと恥ずかしさで複雑な気持ちでした。これにこりず感じたことを素直に句作を楽しみたいものです。

湧水 第六号 の 正誤表

誤 正 正 証

* 1ページ 2句目 螳螂 | 螳螂 | 又は 螳螂 | 又は 螳螂 |

誤 正

* 5ページ 1句目 栗のいげ | 栗の毬 |

『目次・会員』（アイウエオ順）

俳号	氏名	頁	俳号	氏名	頁
故朝香	河合節子様	一	千舟	橋本隆一	十三
鳥城	磯田貞二	二	玄猷	八田豊	十四
泰俊	岩崎泰俊	三	みほ	原口美保	十五
てるお	鵜飼輝夫	四	壽	藤原壽子	十六
童人	川口榮三	五	をさむ	細川修	十七
つねこ	神田恒子	六	桜子	本多敦子	十八
明鐘	菊地利廣	七	道人	前田道紀	十九
合風	久保合介	八	いくよ	三須以久代	二〇
智子	小林智子	九	のぼる	耳塚昇	二十一
陵人	鈴木重成	一〇	まい	宮野信子	二十二
はる	滝沢はる	一一	得自楼	湯山徳次郎	二十三
順治	徳本順治	一二			
たかお	名倉隆雄				

故 河合朝香 様 作句

ふみ石を青く濡らして走り梅雨

平成二十六年六月

朝日より夕陽にかなふ返り花

平成二十六年十二月

追悼の句

自作自詠俳句研修会 会員代表

師走風笑顔と共に君逝けり

鈴木陵人

夕間暮れほのかにひとつ冬菫

前田道人

返り花逝く人惜しみ偲びけり

橋本千舟

真白なる可憐なゆりぞ偲ばるる

池田蓮花

『蟬しぐれ』

磯田鳥城 (貞二)

桑乾を渡りし吟友よ彼岸花

虚空きよを睨む螳郎何を思ふらん

蟬しぐれ余命の事は云はざりき

黄落や黄金鳥の乱れ飛ぶ

独り居の庭に絡緯の声寒し

寒椿八重を崩さず只一輪

自選

岩崎泰俊 (泰俊)

あるかなきかの音たてて夕しぐれ

時雨やり過ぎすつもりの縄暖簾

風邪の子の元気な自宅待機かな

来年も会おうと握手年忘れ

動かざる寒さに街の人動き

熱爛や今は昔の好敵手

『落葉』

鵜飼 てるお (輝夫)

ひとり立ついつか来た浜鰯雲

己が葉の下に抱かれ木の実かな

一 二 三 木の实数ふる童かな

舞ひ上がりなほ舞ひ上がり銀杏かな

透きとほるピアノノ音流る柿落葉

はかなげに散る山茶花や街暮るる

『ひととせを』

川口 童人 (榮三)

律儀かな日にちたがえず栗届く

車窓から眺め紫陽花色嵩む

鰯雲大漁祈りて舟を出す

小瀧でも大きく見せる岩ひとつ

ひととせをもうと言う人年惜しむ

落葉踏む音さくさくの散歩道

『落葉路』

神田 つねこ (恒子)

栗のいげ掃きて根元に集めけり

夕立やりハビリを終へ迂路を行く

ベランダのバケツに揺るるうろこ雲

5

夕映えの落葉路そぞろ老ひ姉妹

熱爛や話題とぎれづ吟仲間

山茶花や白一色に墓所

『熱爛』

菊地 明鐘 (利廣)

本堂の読経聞え来菊日和

山茶花や目白群れ飛び花散らし

山茶花や空家の庭の片隅に

6

銘柄を選んで熱爛至福かな

熱爛や友の熱弁目を瞑る

高層のビルの夜景や年惜しむ

『大宇宙』

久保合風 (合介)

真つ先に仔犬駆けゆき夕立晴れ

若き日を語り酒酌む月今宵

栗好きの娘に電話夜更けかな

半纏の漁師舟出すいわし雲

大宇宙落葉の下に虫世界

楊貴妃や彼の世から来て姫椿

7

『蝉しぐれ』

小林智子 (智子)

蝉しぐれそよ風の立つ日暮かな

秋の虹病む夫のいて祈りあり

蛇の衣失せしあたりの風さわぐ

から松の林にひとり秋深し

極月や夫のすがたの去りしまま

味噌搗きや伝えたきこと孫嫁に

8

『身辺平穩』

鈴木陵人（重成）

どんよりの雲を枕に昼寝かな

登校の児等歩き去り菊日和

願うこと多き我身や鰯雲

旧き書を主役に据えて秋の夜や

熱爛や牧水風に嗜めり

山茶花や童唄など口遊み

『清流』

滝沢はる（はる）

風やさし抜けし軒下猫昼寝

夕立や天七色とかざりおり

清流をながめて足湯菊日和

園児らの声のはじけて鰯雲

ビル風に落葉舞ひたる昼下り

もみぢ和え熱爛一本つけにけり

『金婚式』

徳本 順治 (順治)

梅雨晴間いどむ五千歩万歩計

生活のリズムとなりし妻昼寝

妻と待つ嫁が作りし栗ご飯

木の実落つ老い二人ゆく尾根づたい

山茶花やいつしか散りて庭染まる

金婚の式年終へて年惜しむ

『円居』

名倉 たかお (隆雄)

かわせみを待つやカメラの連なりて

照り映える紅葉四角に納まりぬ

極小の種や変じて太る蕪

凍て空を一気に切り裂く飛行雲

先哲の思索を辿る落葉径

鍋囲む円居賑しや除夜の鐘

『八十路』

橋本千舟 (隆二)

山小屋に地図を拡げて昼寝かな
しろじろと一湾煙る大夕立
割烹着の奉仕隊や菊日和
来し方を思ふ八十路やいわし雲
木の実落つ音を背に聞き山下る
山茶花や四十余年の家居して

13

『吟友逝けり』

八田玄猷 (豊)

雨上がり一声だけの法師蟬
真夜中の公園に満つチンチロリン
涼風や大手術終へ妻戻る
今日も晴れ貰いし渋柿妻とむく
冬空に昇るが如く吟友逝けり
木枯しに下校見守る爺が立つ

14

『心太』

原 口 みほ (美穂)

母の日に西瓜供へし嫁ありて

心太食べて懐かし夫偲ぶ

運動会高く響ける行進曲

ピアノ弾く孫の姿や秋日和

彼岸花母への思ひ遠き日に

詩を詠ふ真白き心富士の雪

『ひまはり』

藤 原 壽 (壽子)

生きている証し詠みたし夏の雲

深山に己つらぬく滝のあり

ひまはりや存在感といふ力

ものの無き時代を生きし南瓜かな

眼差は一步未来へ天高し

あの日まで歩いて戻らう青蜜柑

『泰山木の花』

細川 をさむ (修)

妻恋ひや泰山木の花が散る
散水や庭に小さな虹懸かり
せせらぎや毬栗拾ふ親子づれ
肌寒や褒めて厳しく教へられ
池のほとり山茶花散るや老いひとり
切り株に雨 ひとひらの散紅葉

『菊日和』

本多 桜子 (敦子)

年重ね昼寝のゆとり生まれけり
夕立に人の流れは早送り
亡き夫の思ひ出つゝのる菊日和
熱爛やいつか心のなか酔へり
垣根越し山茶花の花盛りかな
彼や是れ想ひを繋ぎ年惜しむ

『生き骸』

前田道人 (道紀)

峰の茶屋零余子飯よし団子よし

菊人形解く職人に凭る姫御

挨拶はお寒いすねの日本哉

生き骸蒲団にもぐり息をつく

着膨れをはき出しているイブの街

襟巻をふた重に捲いて築地行

『山茶花』

三須いくよ (以久代)

寺の屋根流る夕立渦を巻く

夕立の踏切急ぎ渡り来し

花みづきその実ついには紅となる

憧がれてまだ見ぬ「みすず」鯛雲

山茶花の赤白 子規はさてどちら

病みし子に心の重し露時雨

『夕立』

耳塚のぼる (昇)

海鳴りを遠くに聞きて昼寝かな

縁側に母娘の笑ひ菊日和

大神の白木の鳥居翳雲

ひとり居の手持ぶさたや落葉掻き

山茶花や小雨に紅の薄明り

あれもこれももう還らぬぞ年惜しむ

『昼寝』

宮野まい (信子)

子の背をそつと叩きて昼寝かな

夕立やしをれし野菜立ち上がる

天の川空に遍く広がりし

空に鳴り光る稲妻見て恐し

うれしさに笑みのこぼれし栗ご飯

大空に菊の花火のみごととなり

『満緑』

湯山 徳次郎 (得自楼)

みどりの日満緑の中奢りとも

残り鴨追ひつ追はれつ池の面を

独吟す呼吸ひと息暑氣払ふ

いたどりの闇に光れど疎んずる

鈴懸の葉ずれさやけき音楽堂

納骨の供華の中なる白桔梗

23

俳句を楽しむ

神田つねこ

十七文字で心を詠う。俳句とは、すごい、と人ごとのように思っていました。その自作自詠俳句研修会に入会して一年になりました。

与えられた兼題を五七五に折り込んで俳句を詠む、と習い教えられても、言葉がなかなかみつからず四苦八苦しています。

諸先生方に良い言葉や俳句への助言を戴きながら回を重ねて参りました。

「湧水」第五号(昨年九月発行)の句集を手にした時、私の俳句が活字になつて載っていたのには感慨深いものでした。

その後は、少し楽しむ心を加えて、俳句を作り、その句を吟詠しております。

これからも句会・名句鑑賞・吟行会・等等、休まず続けていきたいと思っております。

自作自詠俳句研修会の行事

(一) 例 会 毎月第二火曜日午後二時より

基礎研修・自作自詠・句評

部外講師の指導など

(二) 行 事 吟行会・納会・特別研修・その他

(三) 句誌の発行 句誌の発行は年二回 原則一月と七月

俳句を作って楽しみましょう!

俳句自作自詠研修会へのご入会をお待ち致します

千代田岳精会

自作自詠俳句研修会役員

参 与

運営委員

鈴木陵人 徳本順治

顧問 前田道人

磯田鳥城 池田蓮花

顧問 湯山得自楼

岩崎泰俊 八田玄猷

リーダー 橋本千舟

耳塚のぼる 小林智子

運営担当 本多桜子 ・ 久保合風

菊地明鐘 藤原壽

神田つねこ

企画担当 細川をさむ ・ 鶉飼てるお

編集担当 川口童人 ・ 滝沢はる